

秋田県におけるソラマメの春播き栽培技術

第6報 ハウス雨よけ栽培による品質向上と作期拡大

田口 多喜子・加賀谷 松和・田村 晃

(秋田県農業試験場)

Cultivation of Brad Bean for Spring Seedling in Akita Prefecture

6. Improvement of quality and extension of cropping season under the plastic house

Takiko TAGUTI, Matuyori KAGAYA and Akira TAMURA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

秋田県のソラマメ春播栽培では、6月末から7月上旬に収穫が集中する。このため、年によっては価格が不安定であり、収穫労力も分散できず、栽培面積が伸び悩みの傾向にある。

本報では、市場の要望も踏まえて、作期前進と品質・収量向上のためのハウス雨よけ栽培について、育苗方法・育苗日数・定植期を変えて検討した。

2 試験方法

供試品種としてハウス陵西1寸を用い、7.5cm径の黒ポリポットに1994年2月10日(40日育苗)、2月21日(30日育苗)に播種し、加温及び無加温下で育苗した。加温育苗は、播種から出芽までをガラスハウス内電熱育苗とし、出芽揃いまで20℃(±2℃)に加温し、以降を無加温パイプハウス内で管理した。無加温育苗は、播種から定植までの期間、上記無加温パイプハウス内で行った。3月22日にハウス内に定植した。

表1 試験区構成(1994年)

試験区	播種期	定植期	育苗方法
1	2月10日	3月22日	加温40日
2	"	"	無加温40日
3	2月21日	"	加温30日
4	"	"	無加温30日
5	"	4月10日	無加温50日
6	3月1日	"	無加温40日

表2 定植期別育苗方法別生育状況(1994年)

試験区	定植期		成苗率	開花期	開花期			収穫期			
	草丈 (cm)	葉数 (枚)			草丈 (cm)	茎数 (本)	着花節位 (節)	草丈 (cm)	茎数 (本)	有効茎数 (本)	着莢節位 (節)
1	10	3.2	100	5.8	51	7.4	6.5	116	7.6	6.5	4.7
2	8	2.7	84	5.8	52	8.2	5.9	114	9.3	7.5	4.6
3	7	2.2	94	5.11	51	8.0	7.6	109	7.7	6.7	5.1
4	5	1.7	88	5.12	52	7.1	5.7	114	7.0	6.8	4.8
5	12	4.0	88	5.9	39	5.8	6.8	93	6.6	6.1	5.8
6	10	3.6	77	5.12	45	6.7	6.8	96	6.5	6.2	5.3

注. 最下着莢(花)節位は最長茎のものとした。

また、慣行作型と同時期にハウス内定植した場合の、生育・収量を確認するため、無加温条件で40日及び50日育苗した苗を用い、4月10日に定植した。ただし50日育苗は9cm径の黒ポリポットを用いた。

栽植密度は、畝幅120cm、株間30cm(2,777株/10a)とし、栽培全期間を地温上昇抑制型マルチ(ミラネスク・ひえひえ〜全農・2層構造マルチ)を行った。

施肥量は、緩効性入り化成肥料(LP苦土安2号・40日タイプ)を用い、前作の残存肥料を考慮し、慣行施肥の約80%に当たる10a当たり10kg(窒素成分量で)を全量基肥として施用した。土壌改良資材は10a当たり堆肥2t、苦土石灰、ようりん各60kgとした。

3 試験結果及び考察

育苗方法・定植時期別の生育状況を表2に示した。

定植期の生育は、3月22日定植で加温育苗が無加温育苗に比べ、草丈・葉数ともに勝った。これは、出芽に要する日数が加温育苗で短いことによるものである。成苗率は、加温育苗で高い傾向にあった。開花期の生育は、3月22日定植において、草丈は大差ないものの着花節位で無加温育苗が1~2節低くなった。収穫期では、草丈・着莢節位は大差なかったが、無加温40日育苗で有効茎数がやや多かった。

4月10日定植においては、定植後ハウス内気温が上昇してくることから、3月22日定植に比べ、草丈、有効茎数、着莢(花)節位とも劣った。

収穫は、各区とも6月14日から始まり、その後2回程度

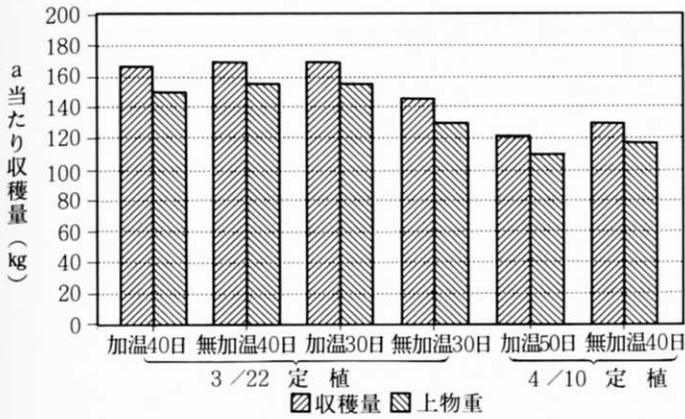


図1 育苗方法・定植時期別収穫量(a当たり可販英:1994年)

の収穫で終了した。a当たり可販英収量を図1で見ると、早播き、早植え区で高く、2月10日播きの無加温40日育苗と2月21日播きの加温30日育苗の収量が同程度で最も勝り、2月10日播き加温40日育苗がこれに次いだ。いずれの区も定植期は3月22日であり、4月10日定植の2区については、低収となった。

図2に10株当たりの英の粒数別重量構成を示した。いずれの区においても1粒英の発生は10%以下で、早播き、早植えで上物英(2粒英以上)の割合が高くなった。

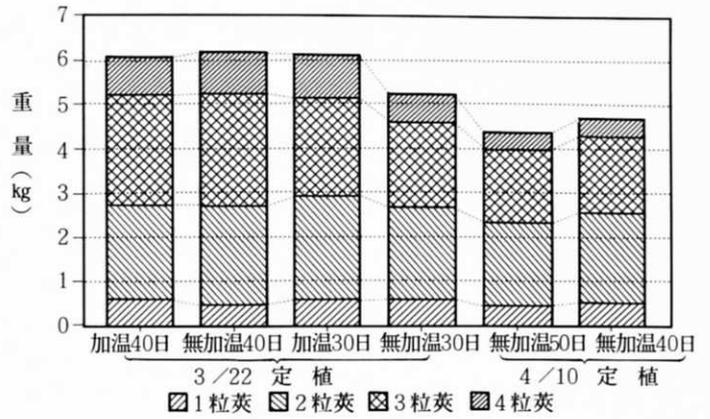


図2 英粒数別収穫量(10株当たり:1994年)

4 ま と め

ハウス雨よけ栽培の定植期は3月20日頃と見られ、定植期までに3葉程度の苗を得るためには、2月10日播種が適する。しかし、2月上旬は厳寒期に当たるため、無加温育苗では、発芽までの日数がかかること、成苗率が低くなること等から、加温育苗が適当と思われた。

ハウス雨よけ栽培を行うことにより、収穫期は、慣行栽培より10日程度前進し、しかも高品質、安定収量が得られた。